

2026年度入学者 一般選抜 後期日程 試験問題

群馬県立女子大学 文学部 文化情報学科 小論文

試験時間は、60分です。中途退室は認めません。
途中で気分が悪くなった場合は、黙って手をあげてください。

問題は2問、問題用紙はこの表紙を含めた 10 ページ(最後の白紙部分は下書き用)です。
解答用紙は2枚です。横書きで記入してください。さらに下書き用の紙(白紙)を1枚配ります。

それぞれが配られたら、指示に従って、各解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してください。
試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

問題

問 1

相対的貧困率とは、家計における平均的な所得(等価可処分所得の中央値)の半分を下回る世帯で暮らす人口の割合である。ただし、等価可処分所得は、世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得である。

次のページの図 1 は OECD 諸国の年齢別相対的貧困率を、図 2 は OECD 諸国の世帯別相対的貧困率を示したものである。図 1 および図 2 を参照し、日本の相対的貧困率について、全体の傾向、年齢別の特徴、世帯別の特徴を他国と比較しながら説明しなさい。また、これらの特徴が見られる理由について、あなたの考えを述べなさい(500 字以内)。

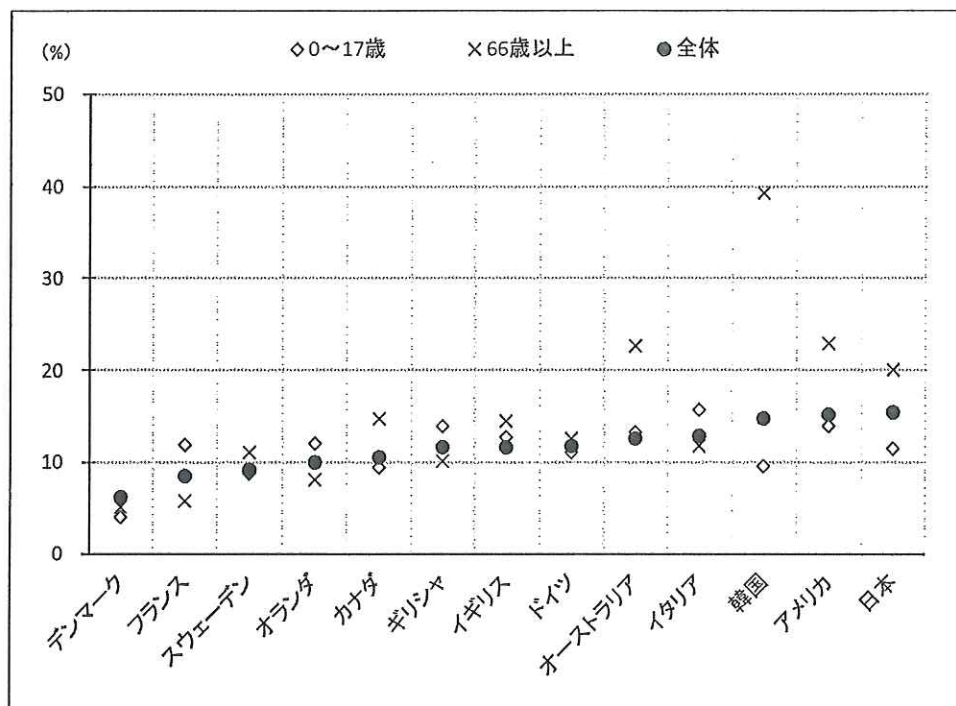


図1 OECD 諸国の年齢別相対的貧困率

オーストラリアは2020年、その他は2021年のデータ。

出典:OECD, Income Distribution Database (IDD)より作成。

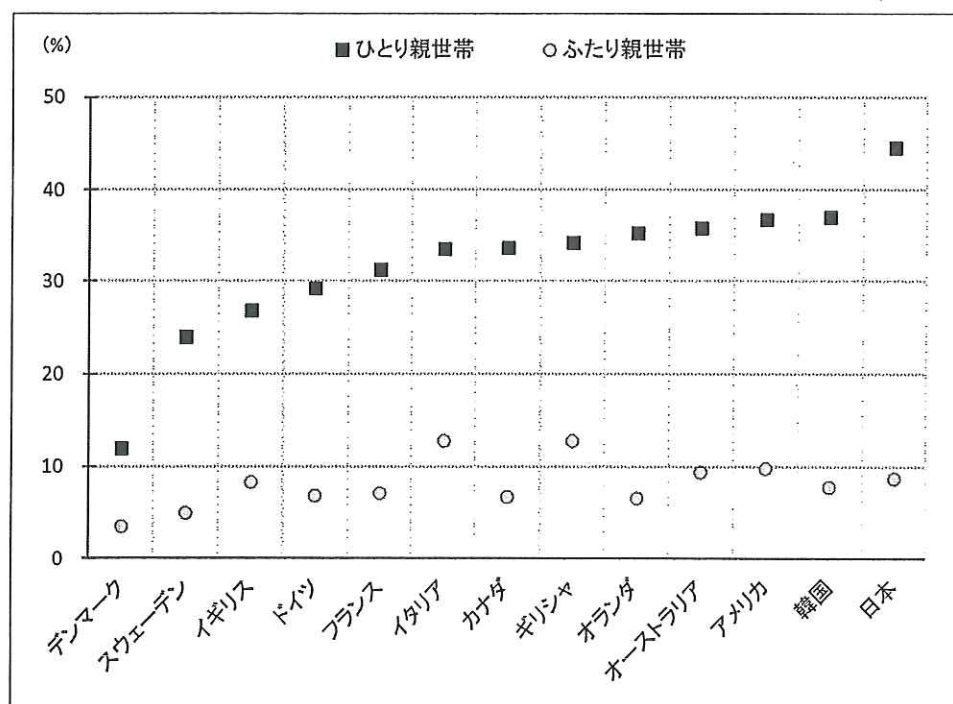


図2 OECD 諸国の世帯別相対的貧困率

デンマークは2019年、オーストラリア、ドイツは、2020年、その他は2021年のデータ。

出典:OECD, Family Databaseより作成。

問 2

以下の文章は、人間と情報について述べたものである。人間と情報について、本文を読んで書かれていることをまとめた上で、下線部「こうした情報化によって、今後、人間はどのような文化を生み出していくことでしょうか」に対し具体例を挙げてあなたの考えを論じなさい(500 字以内)。

情報について

人間とは、話す動物である。

——ノーバート・ウィーナー

これがウィーナーの人間についての定義です。いかにもわかりきった、平凡な定義のように思えますが、数学者であり、通信工学、情報理論の権威であり、何より「サイバネティックス」という、新しい科学の創始者として知られるウィーナーが、人間について、とことんまで考えたすえ下したこの定義は、それなりに深い意味を持っているのです。

フィード・バックということばを、しばしば耳にされたことがあるでしょう。フィード・バックというのは草を食べながら進んで行く羊の群れが、ふと、もどって食べ残した草を食べることを意味します。これと同じように、機械が一定の段階で自動的にあともどりして、作業に遺漏のないように点検する、それをフィード・バックというのです。

この術語は、いまでは私たちの常識語のようになってしまいましたが、それもウィーナーのおかげと言えましょう。なにしろ、ウィーナーによって、機械そのものはもちろん、私たちの機械観も、かなり変革されたのですから。あの「サイバネティックス」という新しい考え方によって。

サイバネティックスとは何なのでしょう。

それは、ギリシア語の「舵手」^{だしゅ}（出題者注¹）ということばかりきています。つまり機械の中に舵手を組みこむこと、これまで人間でなければできないと思われていた調整能力を機械に持たせること、そのための理論です。そのためには、まず人間の能力というものを徹底的に分析しなければなりません。分析したあげく、ウィーナーは、「人間が話す動物である」ということ、すなわち、情報をきわめて巧みに伝え合う生物であることに思い至ったのでした。

むろん、情報を伝え合う動物は人間にかぎりません。いや、いっさいの生物は、なんらかの形で情報を交換し合っています。ミツバチのダンスが巧妙なコミュニケーション手段であることや、アリの触角が情報交換に大きな役割を果たしていることや、その他いろいろな生物の、さまざまなことばが、つぎつぎに解明されつつあります。が、ウィーナーによりますと、コミュニケーションの欲望、いや、コミュニケーションの必要が、生活の主導的な動機となっている動物は、人間をおいて他にない、ということです。つまり、人間の本質は、情報を交換するという点にある、と言うのです。この意味で、冒頭のことばを、「人間は、情報的動物である」と言いかえてもいいでしょう。

サイバネティックスとは、まさにこの観点を足場にして、人間と機械の問題を解いていこうという新しい科学なのです。

では、情報とは何なのでしょう。(中略)

情報というのは、そもそも客観的に存在しているものなのでしょうか。たしかに、この世界にはさまざまな現象が生起しています。それらいつさいを情報と考えることはできますが、情報というもののいちばんかんじんな性質は、それを情報として受けとる当の主体がなければ意味をなさない、ということではないでしょうか。

たとえば、私の目の前に一枚の新聞が置かれています。それはまさしく情報にちがいありません。けれど、いくらその新聞紙に情報が満載されていたとしても、私がそれを手にとって読まないかぎり、それは一枚の紙でしかありません。つまり情報は、私がそれを読むという主体的な行動によって、あるいはテレビを見るという行為によって、あるいは何かを感じとるという体験によって、はじめて情報たりうるのです。言いかえれば、情報とは、それを情報として受けとる主体なしには、なんの意味も持たないということです。

ミツバチにしても、いくら巣の前で巧妙なダンスをしてみせたところで、そのダンスから意味を受けとる相手のミツバチの「読む」行為がなければ、それはまったく無意味な運動でしかありません。

そうなんです。情報は、それを受けとる側にこのうえない比重がかかっているのです。いつさいの生物はこうして情報を伝え、それを受けとりながら生きているのですが、その中でも人間は、抜群の能力で情報を読みとり、情報を発信する、

つまり、話し合うことのできる動物です。人間はこの世界のすべてを情報化する動物なのです。情報化することによって、偉大な進歩を成し遂げた生物です。人間の栄光は、じつに、その情報化の資質に由来すると言ってもいいでしょう。そして人間は、いまや、人間が情動的動物であるという、まさにそのことに気づいたのです。人間そのものを情報化することに成功したのです。こうした情報化によって、今後、人間はどのような文化を生みだしていくことでしょうか。

ウィーナーの、人間についてのあの定義は、そのような人間の本質をズバリ言い当てるとともに、人間の未来に対する期待と不安を言い表わしているように私には思えてなりません。

森本哲郎『ことばへの旅1』（角川書店、1977）

【出題者注】

（1）舵手：船のかじをとる人。

下書き用